

一 次の文章は、画家真山魁夷の著書によるものです。A・B・C・D・Eの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A 夏の早朝の風が爽やかだった。足もとの草は露に濡れていた。(1)いま目覚めたばかりの町の家並みが見下ろされ、その向こうに静かな海が明るく広がっている。

小高い丘の上である。背後には、緑の山々が連なり、西の端で海に落ち込んでいる。そこに、大きな島影がかすんで見える。

母親と男の子が丘に立っていた。その紺紺の着物の子は、少年の日の私である。(2)病気がちで、神経質だった私を、母は夏休みになると、時々、朝早く連れ出して、この丘に登った。

母に起こされ、眠い眼をこすりながら仕方なくついて来た私であるが、丘からの眺めの快さに、子供心にも自分の心身が清められるのを感じた。

幼い時の記憶は、①本棚レイを重ねるうちに、心の中で②イタエにも変り変えられて、もとの形とはよほど違ったものになっているはずである。また、その場所も時の移りとともに変わってしまうものであろう。

しかし、二年ばかり前、神戸へ行つたついでに、ふと思い立って、ここと思われる場所を訪ねてみた。今では小公園風に整地されていて、以前、夏の朝露が足を濡らした草むらなどはなくなっていたが、そこからの眺めは、私の心にある五十数年前の風景そのままであった。

なぜ、この風景がいつまでも新鮮な映像となつて残っているのだろうか。少年の私は、その時、意識したわけではないが、その風景を母の慈愛のあらわれ、生命の泉として感じたのではないだろうか。この風景は③私にとつては不死である。

B (4)自然を人間と対立するものとしなない感じ方、考え方が、幼い頃から私の中に芽生えていたことは事実である。

(5)山の中の小さな池に緑の木々とそのまの姿を映している風景を描いて、校内の展覧会に出品したのは中学三年生の時である。画題を「静か」とした。須磨の奥の人影もない林の中で描いた油絵であった。同じ頃、白っぽい切通しの崖の前を、火葬場に車を運んで行く人々が小さく見える水彩画を描いている。中学校の裏の山あたりで、実際に見た情景からである。(6)この絵の方は誰にも見せなかつた。

これらの二つの作品は、幼稚なものではあるが、共に心象風景である。全く異なつた風景であるが、(7)自己の内部に在るものが外の世界と呼応し合つて結んだ映像である。少年の私は飽まれた背い果実であつた。心身の病が進んでいくのを、逆らい難い気持ちで見詰めている心と、一方では救いへの祈りを、静かな浄土を宿す風景に求めていたものと考えられる。

C その年は一学期の半ばから休学して、淡路島の町はずれにぼつんと建っている小さな家で、夏休みへかけて過ごすことになった。そんな寂しいところへ、子供を独りでやつておくことは、普通の親なら心配であらう。(8)殊に私の両親は人一倍、子供に甘いほうであつた。

しかし、そこは私の家に長くいたお手伝いさんの実家で、独り住まいの年寄りの母親が、私の面倒をよくみてくれた。私は中学一年生の時から、夏休みには毎年、幾日かをその家に泊めてもらっていた。それに、独りでいるほうが気持ちが休まる性質であることを、私の両親はよく知っていたからである。

その家は海に近く、波の音が夜になるといつそうよく聞こえてくるのだが、(9)それは物憂く、甘美な調子が響つていて、私を安らかな眠りに誘い込むのだった。海の明け暮れの壮大な光と色彩のドラマ、風と波との絶え間ない④戯れを私は飽かず眺めた。自然と私とは、終日、親しく語り合っていた。

風が激しく雨戸を叩き、波が磯に白いしぶきを高く揚げる日もあったが、私の記憶の中では、この海辺はいつも私を優しく包み、安らぎを与えてくれる風景として残っている。夏休みが終わると、私は日焼けして、かなり健康そうな様子になって、両親の計へ戻って来た。

瀬戸内海に面した山と海との夏の日の風景は、むしろ、平凡なものであるが、清らかに煙んでいて、根源的な生命の存在を伝え、人間の心の温かさと善意を反映するものであった。暗い底へ落ち込んでいきそうな自己を持て余していた当時の私にとっての救いであつたばかりでなく、ずっと後に至るまで、私の心の奥深くに内在して、私の精神を導く要素の一つとなったことは確かである。

D 東京美術学校へ入学した一年生の夏、友人と御岳へ登る約十日間の旅をした。私には生まれて初めて見る山国の姿である。神戸という明朗な港市と瀬戸内海の優しい環境に⑤馴染んでいた私は、山国の厳しい自然と、そこに住む人々の生活に強く心を打たれた。

途中、キャンプをする場所を探しているうちに、大粒の雨が降り出した。雨はますます激しく、稲妻が杉木立を引き裂くように閃き、すぐ頭上を、バリバリと空気を振動させて雷鳴がとどろき渡る。

ずぶ濡れになった私たちは、とある農家へ入って、わけを話し、土間でよいから泊めてほしいと頼んだ。小柄な老婆が独りだったが、快く迎え入れてくれた。頑丈な木組みの天井、黒光りのする柱。老婆は私たちを部屋に通して、お茶など振舞ってくれた。そのうちに忘れたように雨が止んだ。

私たちは、それからいろんな経験をしながら木曾路を辿り、御岳へ登った。八合目あたりから風雨が強くなり、翌朝、剣ヶ峰へ登ったが、霧が滴を巻いて、ただ空漠とした灰色の世界であつた。

⑨この時の感動が基になって、その後、私を山国へ、そして北方の世界へ結びつける道が開けたのである。深い雪におおわれた長い冬。痩せた土地。厳しい気候風土に、しっかりと耐えて生き抜いている人や樹木。そこに生まれる精神的な荘重さ。素朴な人間味。

芸術の世界へ足を踏み入れたばかりの私ではあったが、この道の険しさが、ひしひしと身に迫って来るのを覚えていたにちがいない。また、父の商売が傾いて、勉学の前途に多難なものを予感していた当時の私は、母性的な優しい慰めとは異なった精神的な強い支えを求めていたのであろう。山国の風景はそのような私の心の願い、折りを象徴するかに思われた。そして、これもまた、今日に至るまで私の精神を導く大きな要素となったのである。

E 風景とは何であろうか。私たちが風景を認識するのは、人間が個々の眼を通して心に感知し感動することであるから、厳密な意味では、誰にも同じ風景は存在しないとも言える。ただ、人間同士の心は互いに通じ合えるものである以上、私の風景は私たちの風景となり得る。私は画家であり、風景を心に深く感得するには、どこまでも私自身の風景観を掘り下げるより道はないのである。しかし、画家の特殊な風景観があるのだろうか。⑩私は□である前に□である。

私は少年の日に、深く心に感じ、その後の人間形成に重要な二つの要素となった精神的基盤を、風景に象徴させて語った。ここに表れている風景との緊密なつながりは、私の個人的体験にとどまるものではないと思われるからである。

私は人間的な感動が基底になくて、風景を美しいと見ることはあり得ないと信じている。風景は、いわば人間の心の折りである。私は⑪清潤な風景を描きたいと思っている。⑫オセンされ、荒らされた風景が、人間の心の救いであり得るはずがない。風景は心の鏡である。庭はその家に住む人の心を最もよく表すものであり、山林にも田園にもそこに住む人々の心が映し出されている。河も海も同じである。⑬その国の風景はその国民の心を

すると書えよう。

日本の山や海や野の、何という荒れようであらうか。また、競って核爆発の灰を大気の中に振り撒く国々の、何という⑧ムボウな所業であらうか。⑨人間はいま病んでいる。⑩白っぽい切通しの庭の前に行く葬送の列は、少年の日の私の幻想ではなく、現在の人間の儚らぬ姿であるかもしれない。

母なる大地を、私たちはもっと清浄に保たねばならない。⑪なぜなら、それは⑫だからである。自然と調和して生きる素朴な心が必要である。⑬シンコウの樂園に生命の輝きは宿らない。

私たちの風景という問題には、今こそ私たち人間の生存が懸^かっていることを、⑭否応なしに深く考えざるを得ない現在である。

(東山魁夷『日本の美を求めて』による)

注 切通し＝人が通るために、山や丘などを切り開いて作った道。

問一 二重傍線部のカタカナを漢字で記しなさい。

①ネンレイ ②イクエにも ③オセンされ ④ムボウな ⑤シンコウの

問二 二重傍線部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

⑥殊に ⑦戯れ ⑧馴染んで ⑨清浄な ⑩否応なしに

問三 傍線部①～⑭について、それぞれの問いに答えなさい。

- (1) 傍線部①「いま自覚めたばかりの町の家並み」とありますが、ここで使われている比喩的な表現を何といえますか。漢字で記しなさい。
- (2) 傍線部②「病気がちで、神経質だった私を、母は夏休みになると、時々、朝早く連れ出して、この丘に登った」とありますが、このことを後に筆者はどのように受け止めていますか。Aの文章中の言葉を抜き出して記しなさい。
- (3) 傍線部③「私にとっては不死である」とありますが、これと同様の内容を表している四十字以内の箇所を、Cの文章中から抜き出し、そのはじめと終わりのそれぞれ三字を記しなさい。(句読点は字数に含めます)
- (4) 傍線部④「自然を人間と対立するものとしないう感じ方、考え方が、幼い頃から私の中に芽生えていたことは事実である」とありますが、筆者は後に画家としてどんな絵を描くようになったのですか。文章中の一部を抜き出して記しなさい。
- (5) 傍線部⑤「山の中の小さな池に緑の木々がそのままの姿を映している風景を描いて、校内の展覧会に出したのは中学三年生の時である。画題を『静か』とした。須磨の奥の人影もない林の中で描いた油絵であった」とありますが、筆者はこれをどんな思いで描いたと述懐していますか。Bの文章中から端的に表現している箇所を抜き出して記しなさい。
- (6) 傍線部⑥「この絵の方は誰にも見せなかつた」とありますが、それはどうしてだと想像されますか。次の文の空欄に入る適当な言葉を、Bの文章中から抜き出して記しなさい。
この絵を人に見せることによって、自分の [] を知られるかもしれないと思ったからであらう。
- (7) 傍線部⑦「自己の内部に在るものが外の世界と呼应し合つて結んだ映像である」とありますが、これと同様の内容の一文を、Eの文章中から抜き出し、そのはじめと終わりのそれぞれ三字を記しなさい。(句読点は字数に含めます)
- (8) 傍線部⑧「それ」の指す言葉を、文章中から抜き出して記しなさい。
- (9) 傍線部⑨「この時の感動が基になつて、その後、私を山国へ、そして北方の世界へ結びつける道が開けたのである」とありますが、それはどのような思いからだったと述懐していますか。Dの文章中から該当する

三十五字以内の箇所を抜き出し、そのはじめと終わりのそれぞれ三字を記しなさい。(句読点は字数に含めます)

例 傍線部①「私は[]である前に[]である」の二つの空欄に、Eの文章中の適当な言葉を抜き出して記しなさい。

例 傍線部②「その国の風景はその国民の心を[]すると言えよう」の空欄に、Eの文章中の適当な言葉を抜き出して記しなさい。

例 傍線部③「人間はいま病んでいる」の原因を、筆者はどのように思っていますか。解答欄の「を失っているからと思っている」に続く言葉を、Eの文章中から十五字以内で抜き出して記しなさい。(句読点は字数に含めます)

例 傍線部④「白っぽい切通しの崖の前を行く群衆の列は、少年の日の私の幻想ではなく、現在の人間の偽らぬ姿であるかもしれない」とありますが、ここで筆者が述べようとしていることは何ですか。次の文の空欄に、十字以内の適当な言葉を考えて記しなさい。

このままだと[]しまう。

例 傍線部⑤「なぜなら、それは[]だからである」の空欄に、Aの文章中から適当な言葉を抜き出して記しなさい。

問四 A・B・C・Dの文章を筆者が要約している一文を、Eの文章中から抜き出し、そのはじめと終わりのそれぞれ三字を記しなさい。(句読点は字数に含めます)

二 次のような場面での対応に、社会人としてどのような敬語表現がより適切ですか。例にならって傍線部を改めなさい。(二つ以上の言い方がある場合は、そのうちの二つを答えること)

【例】(式典会場受付で)「私たちが案内します」

↓ 私どもで案内いたします

- ① (市役所の受付窓口近くで迷っている人に)「何の用ですか」
- ② (初対面の人から手渡された名刺の名が読めない時に)「失礼ですが、何と読むのですか」
- ③ (受付時間外の来訪者に)「明日もう一度、ここへ来てください」
- ④ (銀行員が客に手続きの内容を確認する場合)「その件については知っていますか」
- ⑤ (顧客から配達日時を念を押されて)「はい、わかりました」
- ⑥ (顧客から上司への伝言を依頼された場合)「そう言っておきます」
- ⑦ (先生に都合を尋ねる場合)「都合はどうですか」
- ⑧ (目上の人を訪ねる電話連絡をする場合)「明日の午前中にいきます」
- ⑨ (会社で、友人を名乗る人から同僚の転居先を尋ねる電話を受けた場合)
「申し訳ありませんが、その件については答えられないことになっています」
- ⑩ (職場で上司よりも早く退勤する場合)「それでは、先に帰ります」